

## 拒絶理由通知書



特許出願の番号	特願 2004-558466
起案日	平成21年 7月 2日
特許庁審査官	柴原 直司 3534 4B00
特許出願人代理人	三枝 英二 (外 2名) 様
適用条文	第36条

この出願は、次の理由によって拒絶をすべきものです。これについて意見がありましたら、この通知書の発送の日から60日以内に意見書を提出してください。

## 理 由

本拒絶理由は平成21年6月30日付けで提出された34条補正の写しの特許請求の範囲に対するものである点に留意されたい。

1. この出願は、発明の詳細な説明の記載が下記の点で、特許法第36条第4項第1号に規定する要件を満たしていない。

## 記

## &lt;1&gt;

請求項1に記載される発明は、プロセッシング切断領域を導入する位置をなんら特定するものではないが、プロセッシング切断領域が特性可変領域を構成する発光蛋白質と蛍光蛋白質の間に位置していない場合は、プロセッシング切断領域がプロセッシング酵素により切断されても発光色変化を起こすことはできず、プロセッシング能を確認することができず、そのようなプロセッシング能を確認することができない蛋白質は、実際にどのような具体的な機能(技術的に意味のある特定の用途が確認できる機能)を有するかを推定できない。

したがって、本願明細書の記載は、請求項1に係る発明を、当業者が実施をすることができる程度に明確かつ十分に記載されているものとは認められない。

請求項1を直接的又は間接的に引用する請求項4, 5, 8, 9, 12, 13及び15~21についても同様である。

## &lt;2&gt;

請求項4に記載されるプロセッシング酵素のうち、プロテアソームは、ユビキ

チン化された蛋白質をATP依存的にアンフォールディングし20Sプロテアソームの中心部にアンフォールディングされた蛋白質を取り込み分解を行うものであるから(例えば、Mol. Reprod. Dev., (2000), 57, [2], p.109-110。)、モニター蛋白質の特性可変領域の構造を維持したままプロセッシング切断領域を切断することはできない。

したがって、本願明細書の記載は、請求項4に係る発明のうちプロセッシング酵素がプロテアソームであるものについては、当業者が実施をすることができる程度に明確かつ十分に記載されているものとは認められない。

請求項4を直接的又は間接的に引用する請求項13及び15～21についても同様である。

2. この出願は、特許請求の範囲の記載が下記の点で、特許法第36条第6項第4号に規定する要件を満たしていない。

#### 記

本願の特許請求の範囲の記載は、請求項2, 3, 7及び10が削除されており、請求項に付した番号が記載する順序に連続番号とされていない。

したがって、請求項1～21の記載は、経済産業省令で定めるところにより記載されたものではない。

(存在している請求項に付した番号を繰り上げて連続番号とすればこの限りでない。)

この拒絶理由通知書中で指摘した理由以外に、現時点では、拒絶の理由を発見しない。拒絶の理由が新たに発見された場合には拒絶の理由が通知される。

-----  
この拒絶理由通知の内容に関するお問い合わせご希望がございましたら下記までご連絡下さい。

特許審査第三部 生命工学 柴原直司

Tel: 03-3581-1101 内線 3486

Fax: 03-3501-0491